

佳作

沁みたまの言葉と音色

神奈川県 聖園女学院中学校二年 鈴木 葉音

十四年前、私がこの世に産声をあげてすぐ、母の容態が急変した。妊娠中は健康上問題のなかった母だったが、私を産んだ途端に血圧が急激に上がり、一瞬で日常生活を送れない程危険な状況に陥ってしまった。そのため、それまでのグループ部屋からたった一人きりの個室へ移され、そこはまるで視聴覚室のような黒々としたカーテンに包まれた四角い空間だった様だ。少しの油断も許されないという医師の判断から、一筋の光が目に入ることも命の危険を脅かすものだった為、それからの母の生活は大変苦しいものだったと聞く。

外の光が全く入ってくるこのないその部屋は、時間が経って目を凝らし部屋の様子を伺うのもやっとなで、一体今が朝なのか夜なのかも全くわからない状態だったらしい。長い妊娠生活から解放され、や

っと子どもに出会えたというのに、考えることは良からぬことばかりで、どこか遠くから聞こえてくる赤ん坊の泣き声に、自分のこの手に抱けないもどかしさで誰も知ることのない涙で枕を濡らした。無理に眠ることも難しく、ただただ時間が過ぎていくのをじっと待って、それは先の見えないトンネルに置いていかれたような、そんな気持ちだったらしい。

そんな母にも救われる時間があった。それは、一人の看護師さんが部屋に入ってきた時だった。

その看護師さんは、正確にはまだ看護学生で、たまたま実習に来てくれていた人だったようだ。母の部屋に入る時は懐中電灯の光を下に向けて入ってきた。その看護学生のA子さんが近くに来てくれた時だけ、暗々とした部屋が薄く見えるようになってきた。まだあどけなさの残るその女性はいつも曇りのない笑顔で、母の沈んだ気持ちを落ち着かせてくれた。何度か顔を合わせるうちに母はまだ学生である彼女に本音を吐くようになっていたようだ。そんな母の手をしっかりと握り優しく擦ってくれた手の温もりは、母にとってのどれだけの癒しになってくれたことだろう。

そんなある日、A子さんが

「今日はプレゼントがあるんです。」

と、一枚のCDを出した。用意していたプレーヤーにそのCDをセットすると、繋がったイヤホンを母の耳にそっと掛けてくれた。曲は母の大好きなディズニ―の曲だった。星空の下で聴いているような、流れるような優しいオルゴールの音色。A子さんは続けた。

「どうしたら、気持ちを少しでも安心させてあげられるのかなって。私考えていたんです。こんなことくらいしか出来ないんですけど。」

瞬間、母の閉じていた瞼から涙が溢れた。自分のことを想ってしてくれたその気持ちに。

私はこの話を母から聞いた時、患者の心に寄り添う看護について考えさせられた。A子さんは母の立場になって考えてくれたのだ。母は一枚のCDとA子さんに救われて無事退院できた。私はそのおかげで十四年間育ってこられた。本当に心から感謝している。